

金光教の声

(平成22年7月～9月放送分)

No. 392

【おへん】

◆シリーズ共に生きる

「保護観察ってなんやろ」（中尾 進）……………3

「命へのまなざし」……………7

「美しい宇宙船」（佐藤元信）……………11

「語れなかった戦争」……………15

◆金光教ラジオドラマ 『花ものがたり』

第一回 バラ……………20

第二回 スイートピー……………25

第三回 トルコキキョウ……………31

第四回 カーネーション……………36

第五回 ヤマユリ……………41

第六回 菊……………46

第七回 ガーベラ……………51

第八回 桔梗……………56

第九回 ひまわり……………61

高砂教会 中尾 進

私は、平成11年5月に法務大臣より保護司として委嘱を受けました。それ以来、保護観察、生活環境の調整、また、犯罪予防活動を主とした活動を11年にわたり続けてまいりました。本日は、その活動の一つ、保護観察についてのお話をしたいと思います。

ある事件を起こした中学生のしんちゃんは両親が離婚し、複雑な家庭環境等の理由から、保護観察が必要となり、私が担当になりました。保護観察には、しんちゃんが立ち直るための約束事がいくつかあります。

その一つに毎日学校へ行くことができました。半年余り学校へ行ってなかったので、中学校へ赴き、彼を登校させてもらえるよう、校長先生はじめ先生方との話し合いを重ね、形だけは整いました。ところが、3学期の始業式の前日、しんちゃんから「行きたくない」と連絡がありました。私は彼に会いに行き、ニコツと笑いながら、肩を抱いて「大丈夫や。一緒に行ったるから」と言うと、安心したのか笑顔で「ハイ」と約束してくれました。私は、出来る限り毎日一緒に登校するようにしました。

2週間程すると、一人で登校するようにはなったものの、環境が変わったわけではなく、親子関係、地域の不良グループとの交際など、いつ後戻りしてもおかしくない課題が山積みしていたのも事実です。

た。

やがて5カ月程経ったころ、不良グループの先輩から誘われ、断り切れず、事件を起し、鑑別所へ送られました。

私は、しんちゃんの影響を変えることが大事と思いい、母親に引受人となってもらいました。母親の実家に引越し、地元の中学校へ転校させ、少年院送致ではなく、何とか保護観察が続いていくよう周囲にお願いをし、そのかいあってか保護観察が再開しました。

不良グループとの交友が絶たれ、彼も母親との生活を喜んでいました。しかし、最初は良好だった親子関係が、慣れない学校生活でのストレスや不満などが芽を出し始め、家に帰ると次第に母親と衝突す

るようになりました。12月も終わりに近づくころには母親が辛抱しきれず、「もう、面倒見られない」と訴えたのでした。そこで今度は、冬休みの間父親に見守ってもらおうよう、お願いをしました。

ところがその数日後、またある事件を起し、警官を振り切り行方をくらすという問題を起こしてしまいました。その直後、私のところに彼から「家の納屋にいる」と連絡が入り、急いで駆けつけました。私は「連絡してくれてありがとう。心配したで。元気で何よりや」と言うと、「すみませんでした。どないしたらええのか分からなくなつて」とのことでした。

私は彼の手を握り、「立ち直ろうと辛抱しとつたけどつらかったんやろな。もつと話を聞いてあげたらよかつたのに、すまんなんだなあ」と言いました。する

と「ようしてもらいました。ぼくがアカンかったんで」と、初めて彼の口から反省の言葉が出たのでした。その後、父親へ連絡を取り、父親に付き添われて警察署へ出頭したのでした。

少年院へ入ることになったしんちゃんは、すぐに父親を身元引受人とし、私が担当保護司となりました。そして、環境調整が始まりました。

父親は、「自分も保護司さんに子どもということで悩んでいることを聞いてもらおうと、気持ちが悪くつきましました。なんで、今まで保護司さんのように、子ども話を聞こうとせなんだのか反省しています。また、息子の話を聞いてあげられるのはお父さんしかないないんですよ、と何度も話してもらったのに、子どもから逃げておりました」と話してくれました。

その後、父親は毎月少年院へ面会に行き、彼の話を聞こうとする気持ちに、次第に変わっていったのでした。

一方、母親は、「自分が辛抱出来なくてすみませんでした」と、私にわびるのでした。私は、「あの時点では、お母さんしか引き受けが出来なんなんです。お母さんがおられればこそです。よう引き受けてくれました。お母さんと過ごした5カ月は決して無駄ではなく、少年院で自分を振り返った時、お母さんへの感謝の気持ちが生まれ、必ず立ち直ってくれると思いますよ」と話しました。

すると、「子どもを自分の思い通りにしようとしたのが間違いでした。子どもの話を聞いて、お互いが分かり合わな、前に進まんですね」と、彼を受け入

れていこうとする気持ちに変わりました。この両親の気持ちの変化によって、少年院を出た後の彼の環境が整っていくことになりました。

保護観察で大事なものは、本人や家族との面接です。じっくりと話を聞くことなのです。聞く側の心の持ちようによつて、相手の心も変わっていくように思うのです。

そのためには丸い心になることが大切です。丸い心とは、落ち着いて何事も良い方へ受け入れていく心です。そうなれば、相手もそういう心になって和やかな間柄になります。ギザギザのくすんだ心であれば、相手の話を聞くまでもなく、自分の思い通りにしようとしてしまい、腹を立て、時には険悪な間柄になり、相手は離れていきます。

恐らく、しんちゃんも両親もそうだったに違いありません。どこまでも相手を認め、受け入れていこうとする、その思いが丸い心となって、笑顔で接することにつながるのだと思います。

いつも笑顔を忘れないよう、これからも取り組んでまいりたいと念願いたしております。
ありがとうございました。

ナレ 愛知県に住む佐々木幸穂さんは、現在23

歳。名古屋大学の大学院でカワウという鳥の研究をしています。鵜といえば長良川の鵜飼いが有名ですが、鵜飼いの鵜はカワウではなくウミウだそうです。

では、カワウというのは一体どういう鳥なのでしょう。

佐々木 普段私たちが目にする鵜っていうのは、ほとんどがカワウです。特徴としては、そうですね、くちばしが黄色で、目が奇麗な緑…、青みがかったエメラルドグリーンっていうんですか

…。すごい奇麗な緑で、他の所は真っ黒…で、くちばしの先から尻尾の先まで大体80センチで、翼を目いっぱい広げると130センチぐらいになる大きな鳥なんですけど、私としてはすごく可愛くて奇麗な鳥だと思ってるんですけど

ナレ 現在、野生のカワウが養殖の魚を食べたり、

糞をして木を枯らしてしまうという問題が取りざたされ、カワウは一部の地域では害鳥として扱われています。佐々木さんは大学に在学中、かわいくてきれいな鳥だと思っていたカワウと人間との間に、そうした切実な問題が潜んでいることを初めて知ったそうです。

佐々木 人間が野生動物に対して、憎い感情を持っていることがすごく悲しいですね、私は。同じ地球の仲間として、仲良くは出来ないかもしれないけど、認めてもいいんじゃないかなと思いますね。

そう言っても、やっぱり困ってる人は困ってるわけで、魚を食べられてしまったりだとか、大事な森を壊されて、困ってる人がいるのは事実なわけで、そんな人にいきなり「カワウだって生きてるんだから殺さないでよ」って言うって、「いや、こっちも困ってるんだ」っていう話になってしまうのは、容易に想像がついたというか…。

それで、何かこう出来る…何が出来るんだろう、むしろ何が足りないんだらうっていうふう考えた時に、今は…私に出来るのは、ひとまず中立的な立場でものを見るものかなと思ったんですね。

ナレ そうしてカワウの研究を志した佐々木さんですが、カワウという鳥の生態については、まだまだ分からないことが多いそうです。佐々木さんは一体どのような研究をされているのですか。

佐々木 私の研究っていうのは、あくまでもそのカワウの基礎的な情報、例えば一日どれぐらい飛ぶとか、何回潜るとかってことですけど、そう

いうことを明らかにすることにしなければならない
ですよね。ただ、その私が研究したことを、い
ずれは論文っていう形に研究をまとめた冊子に
するわけなんです、それがいろんな人に公開、
不特定多数の研究をしている人だったりとか、
カワウに対して何か行動をしている人の手元に
届くわけですね。で、それを読んでくださった
方々がカワウと向き合う時に、何か手助けにな
れるような研究をしようと思ってますね。

ナレ このようにカワウの研究を続ける佐々木さ
んは、子どものころから動物が大好きで、ずつ
と動物に関する勉強がしたかった、と言います。

佐々木 母の影響がすごく大きくなって、母もすごい

動物が好きで、鳥も好きで、家には常に何か動
物がいるっていう状態だったし、本当にいろん
な図鑑を買い与えてくれたりとか、絵本は全部
動物の絵本だとか、そんな感じだったのです。

「三つ子の魂百まで」っていうか、本当にちつ
ちやい時から好きだったみたいですね。

ナレ 佐々木さんの家は、代々金光教の信心をし

ています。そのため、彼女は小さいころから自
然と金光教の教えに触れて育ちました。

佐々木 分かりやすいところで言うと、ご飯をすこ

く大事にする家庭だったというか、ご飯に対し

でも、米粒一つ残さないというか。元になってる命を大事にしていくことを、本当に自然に育ててもらおう中で、教わったように思いますね。

お米っていうのは、一粒一粒生きている。生きているお米を食べさせてもらっている。すべての物は、すべての食べ物は、人の命のために神様が作ってくれたものだから、大事にしなさいと。本当に自然の中の物っていうのを意識しだしていったころだったので、命とか、植物とか、動物が、本当に尊いになっていうことを思っていたので、食卓が上がっている物も、一回は生きていたものだったので、人間のために取ってこられて、調理されて、上がってきたんだっていうのを意識した時に、すごい大事だなと思っ

て、現われたものは絶対粗末にしないようにしようっていうのは、すごく小さい時から、思っていたように、思いますね。

ナレ

佐々木さんは幼いころから、命の大切さや動物を愛する心を自分の中に育んでいきました。

佐々木

人にはどうか憎まないでほしいというか、鳥のことを、カワウたちのことを憎まないで、同じ地球の中に生きてるものだっていうふう

に、時には尊重して、寛大な心を持って、物事を考えてやるとか。とにかく憎しみだけでは何も始まらないかなあっていう、ただ殺すだけでは何も始まらないと思うんですよね。生きてる

金光学園中学高等学校長 佐藤元信

ことの価値を認めてあげるといふか、世の中の人が、他の鳥だけ、カワウだけじゃなくて、野生動物に対して価値を認められるような、世の中になつたらいいなと、思いますね。

ナレ 佐々木さんはカワウの研究に携わりなが

ら、命そのものに素直な眼差しを向けています。どんな生き物も天地の中で私たちと一緒に生かされているもの同士。カワウについて話をする佐々木さんの眼差しは、とても温かく、優しさにあふれていました。

私は現在、金光学園中学高等学校の校長として勤務しています。金光学園は、金光教の教祖の教えを建学の礎としています。教祖様は「天と地の間に人間がいる。天は父、地は母である。人間、また草木など、みな天地の恵みを受けて地上に生きているのである」と教えて下さっています。私は、子どもの頃から天地自然が好きでしたが、私が地球環境に特に関心を持つようになったのは、一人の被爆者に出会ってからです。

昭和54年のことです。私は、中学3年生の国語の授業で、井伏鱒二の『黒い雨』を教えていました。

授業が終わって一人の男子生徒が来て、「先生、こ

の主人公の重松さんというのは、僕の父の叔父さんです」と言いました。『黒い雨』の主人公のモデルが、近くの町に住んでいるとは思ってもかけないことでした。

私は、生徒たちと重松さんを訪問することにしました。

それは、初夏の日曜日でした。重松さんの住んでいる広島県三和町は福山市から車で1時間ほどの山間の農村で、この物語の中で重松さんが仲間と村の池で鯉を飼う話が、そのまま目に浮かぶような所でした。

私たちを迎えてくれた重松さん夫妻は、お元気そうでした。昼食をごちそうになりながら、いろいろ

な話を聞かせて頂きました。

重松さんは、広島市で働いていましたが、昭和20年8月6日、出先の工場に出勤して、これから仕事という時に爆発は起こりました。

顔面にけがをしたが、何とか歩ける。立ち上がった目にした街は一面のがれきと化し、火災が起きていた。奥さんと姪（めい）の矢須子は無事だろうか。重松さんは、倒壊した家屋を乗り越え、死者を傍らに見、重傷者のうめき声を聞きながら我が家にたどり着きます。家はつぶれていましたが、幸い奥さんとも、姪の矢須子さんとも会えました。

会社は解散し、重松さんたちは、大混乱の中を故郷に帰ります。重松さんは、ぼつぼつ農業をしながら、療養に励みます。

ところが、はじめ黒い雨に打たただけで元氣だ

った矢須子さんが原爆症と診断され、そのため縁談が次々と壊れ、症状は重松さんより重くなっています。重松さんも矢須子さんも原爆症に苦しみながら、被爆直後の惨状と三和町での闘病生活を日記に書いていました。

そんな頃、重松さんは、小説家井伏鱒二と出会いました。

井伏鱒二は昭和19年に戦火を避けて東京から故郷の広島県賀茂町に帰っていました。釣りが大好きな井伏氏はよく溪流に出かけ、ある日、重松さんとは出会ったのです。重松さんは自分の被爆体験を語り、井伏氏に日記の全巻を譲りました。井伏鱒二は21年に上京しますが、それから16年後に名作『黒い雨』

が発表されました。

『黒い雨』は、いわゆる戦争文学といわれるものですが、拳を突き上げて反戦を叫ぶものではなく、原爆投下後の惨状について感情を抑えて描写する縦糸の部分と、矢須子さんの日記を清書しながら、矢須子さんの病状を心配し、その死を怖れる重松さん夫妻の心情が横糸となって交互に描かれていく作品です。物語は、重松さんが鯉の養殖場から家に帰る途中雨に遭い、その雨が上がった時、向こうの山に虹が出れば矢須子の病気が治ると心に思い、それが矢須子の死を暗示するところで終わっています。

これは余談ですが、小説『黒い雨』の発表から24年経った平成元年に、映画『黒い雨』が完成しました。私はこの映画の撮影中から関心を持っていました

が、それは、ロケ地の一つに私の住む岡山県金光町が選ばれ、しかも私の家の古い土塀の前を被爆者がよろめきながら歩くシーンがあったからです。映画が完成した時には、モデルの重松さんはすでにこの世の人ではなかったのですが、私には、何度も観た映画の主人公と、生徒たちと一緒に一度だけお会いした重松さんといつも重なってしまうのです。

初夏の日も傾き、その日の訪問も終わろうとする頃、重松さんは生徒たちに向かってこう言われました。

「私たちの住んでいる地球は、美しい宇宙船です。私たちは生まれた時、この宇宙船に乗り込み、懸命に生きて、ある時宇宙船から降りていく。私たちは2度とこの美しい宇宙船を核兵器によって汚しては

いけません」

重松さんの言葉は夕日の光と一緒に私たちの心の底に染み通ってくるようでした。私たちが訪問して1年半後の昭和55年10月20日、重松さんの死が新聞に報じられましたが、私の心から美しい宇宙船のイメージが消えることはありませんでした。その時一緒だった生徒たちもきつとそうに違いないと思っています。

今、地球環境の改善に向けて個人が出来ることは、わずかかも知れません。私も、物を粗末にしない。車のアイドリングは絶対しない。生徒と一緒にクリン作戦に参加する。それくらいです。私の学校には生徒・教師・保護者の実践目標として「人をたいせつに 自分をたいせつに 物をたいせつに」という

言葉があります。昨年から私は、これに一つの意味を付け加えました。

私たちは勉強を何のためにするのか。それは、人を大切にするため、自分を大切にするためである。そして、物を大切にすることは地球環境を大切にすることにつながる。このことを生徒たちに向かって言い続けることが私の実践目標でもありません。

私たちの地球が、いつまでも美しい宇宙船であることを願いながら、これからも生徒たちと共に歩んでいきたいと思えます。

シリーズ共に生きる 「語れなかった戦争」

ナレ 名古屋市にお住まいの石黒美代子さんは、昭和7年生まれ、78歳。最近になって、ようやく戦争のことを語れるようになってきたと言います。当時、13歳の少女には、あまりにもつらい出来事ばかりだったからです。

石黒 「昭和19年の6月に父に招集札状が来ました。面会が許されて父のもとへ会いに参りました。本当は私の父はシュークリームが大好きだったんですけれども、手に入りませんので、母と妹と3人でおはぎを作って重箱に詰めて会いに行きました。面会が終わって帰ろうとしまし

たら、父が『今度は南方へ行くらしい。もしも
のことがあったら、お母さんを助けて教会を守
るように』と私に申しました」

ナレ 石黒さんのお父さんは金光教の教師で、これ
が3度目の招集でした。

翌年、戦争は激しさを増し、名古屋は度々、
空襲を受けました。そして、ある日のことです。

石黒 「朝8時ごろ、空襲警報が鳴りまして、鳴っ
たと思って防空壕に入るひまもなくB29の衝撃で、
焼夷弾（しょういだん）が雨の降るごとく投下され
まして、もう、名古屋城とともに2万戸の家々が焼
けてまして、2700の方が尊い命を亡くされてまして、

私の目の前で教会が焼けて、後から聞きましたけれ
ども焼夷弾が26発も落ちていたって言われて、それ
じゃあもう命があったのが不思議なほど、その教会
が焼けてるのを目の前に見ながら、逃げることもし
ませず、『金光様、金光様』と母とお唱えしながら、
布団をかぶって震えておりました」

ナレ 終戦の前日にも、こんな体験をしました。

石黒 「その日は何度も何度も警報が鳴って、工場
から近くの堤防へ逃げるわけです。避難するわ
けなんです、急にその時、艦載機が低空飛行
してまして、逃げている私たちを目がけて、機
関銃の掃射。こんな恐ろしいことは本当にあり

ません。もう地べたにはいつくばって泣いてお
りまして、このまま死ぬんじゃないかなど。で
すから、戦争の話をしないというのは、このこ
とが一番大きな原因で、この思い出を語ったり
思い出しただけで、もう、胸が高鳴って夜が寝
られない。そういうことで、一番つらい、恐ろ
しい経験でした」

ナレ 戦争が終わり、6畳一間の借家を借りて、教
会としました。わずかに残った身の周りの物を
売りながらの暮らしの中、石黒さんは、兵士が
引き揚げてくる港に何度も足を運びました。し
かし、お父さんは帰ってきませんでした。そし
て2年後、1通の封書が届きました。

石黒 「学校から帰って母が見せてくれたんですけ
れども、その書いてあった言葉が、イシグロト
シハル殿には、昭和20年6月13日、フィリピン
レイハンにて頭部貫通銃創にて戦死せり、と書
かれてあつたんです。はあ、敵の弾に当たって
お父さんは死んだんだね、母は涙一つこぼしま
せんでした。でも、人知れず、夜ご神前にひれ
伏して、涙しておりました」

ナレ 悲しみを抱えながらも、石黒さんはお母さん
と共に教会の復興に取り組み、戦後の日々を送
ります。そして数十年の時が過ぎ、平成3年、
石黒さん58歳の時、慰霊のため、戦没者の遺骨

収集に参加します。お父さんが亡くなったのはフィリピンですが、身近な方々が参加していた沖縄での遺骨収集団に加わりました。

石黒 「奉仕団の方々と一緒に山の中を歩いて洞窟の中を土の中を掘って、掘らせてもらったら本当にご遺骨が出てきたんです。私は、それをかき抱いて涙しました。あつお父さん」

ナレ この時、石黒さんはお父さんが亡くなったフィリピンの地を訪ねたい、と強く願ったそうです。その願いは、翌年実現しました。

石黒 「その時、現地の方の説明を聞きました。もう、この戦争は昭和20年5月には終わってい

た、そうおっしゃいました。戦うにも弾もなく、

内地からの食料の援助もなく、本当に食べる物を求めて山へ山へ、奥地へ奥地へと逃げて、ゲリラの襲撃を逃れて、見渡す山は丸坊主になった、つておっしゃった。木とかそういう口できる物は何でも食べて飢えをしのいだ、でも最後は飢えと病の行軍でした、と言われました。その話を聞いて、ああ、お父さんはフィリピンの土になったんだ、そう思わせて頂きました。とても悲しい、熱いフィリピンの旅でしたけれども、行かせて頂いて良かったなあと思います」

ナレ 戦争のつらさ、空しさを感じて生きてきた石黒さんが、毎朝続けていることがあります。

石黒 「父の写真に白いご飯とおいしいお茶を入れ

て、『ありがとう』と手を合わせ、それから表へ出まして、道を行く人に笑顔で朝のあいさつを交わして、そして車の通行量が激しい所ですので安全を願ひ、それからこの道は世界に続く道とそう信じて、世界の平和を願ひ祈り、道路を毎朝掃かさせて頂いております」

ナレ 一人ひとりの平和を祈る心こそが、戦争を生

まないのだと、石黒さんは、今日も心新たに、

世界につながる道を掃き清めています。

◆金光教ラジオドラマ 『花ものがたり』

(商店街ノイズ)

脚本 柴田寿子

★総合テーマ

「変わろう、私から」

〜思いは言葉や行動にしなければ伝わらない〜

夏子 わたしの家は私鉄駅前の商店街の花屋。父と

母とわたしでやっているが、毎日いろんなお客

さんでにぎわっている。

香織 こんにちは。

夏子 いらっしゃい。あ、香織さん、今日はどんな

お花にします？

香織 えーっと…。母に頼まれたの、お客様がいら

っしゃるので。

夏子 年配の方？ それとも若いお客さん？ それ

によってお花も変わるし…。

香織 実はね、夏子さん、わたしの結婚相手とその

二両親。

第一回 バラ

*登場人物

夏子 (32歳)

香織 (友人・29歳)

明 (33歳)

夏子 えー！ 香織さん、結婚するの？ やだー、

おめでどう！

香織 ありがとう！

夏子 わたしなんか婚活しても駄目で…うらやまし

いなあ。

香織 そんなあ…、フフ…。

夏子 じゃあバラに何かあしらいますようか？ バ

ラの花言葉は“愛情”よ。

香織 お任せするわ。

夏子 うん。ねえ、お相手の方って？

香織 公務員。

夏子 香織さん、お仕事は？

香織 会社、退職するの。

夏子 そう。じゃあ結婚式のブーケは、わたしから

のお祝いに作らせてね。

香織 わあーうれしい、ありがとう！

夏子 そんなことがあって半年くらいしたころ。配

達に行った帰り、近くの川の遊歩道を通りかかったら、香織さんがしょんぼりとベンチに座っていた。

(川の流れ)

夏子 香織さん！

香織 …。

夏子 びっくりさせちゃったかしら、ごめんなさい。

お里帰り？

香織 (涙声) 夏子さん…。

夏子 どうしたの？

香織 わたし、わたし、お仲人さんにだまされて…。

夏子 え？ どういうこと？

香織 お見合いした時にね、実は、わたしはそんな
に乗り気じゃなかったの、だから一度はお断り
したのよ。そうしたらお仲人さんが「先方がぜ
ひにと望んでいる」って言うの。それも一度や
二度じゃないのよ。

夏子 そう。

香織 母は、そんなに望まれて行くのは幸せだって
言うし。

夏子 だからその…だまされたってどういうこと？

香織 わたし、お勤めしてたから、お料理なんて得
意じゃなかったの。でも、一生懸命レシピ見て

ご飯作っていた時にね。

(料理を作っている)

明の声 何ぐずぐずしてるんだ、俺、腹減ってペコ
ペコなんだよ。早く飯にしてくれよ！ お袋な
んて手早くやってたよ。

(料理の音)

明の声 君は本当に手がのろいね。そもそも俺は、
君と結婚なんかしたくなかったんだ。仲人が「相
手の女性があなたのことを大変気に入ってるの
で、ぜひ」って言ったんだ。俺、一度は断った
んだよ。でも仲人がしつこいんだ！ で、仕方
なく結婚した。

香織 えっ！

(皿の落ちる音)

夏子 ひどい！

香織 でしょ。わたし夫に裏切られた気がして、ぼ

うぜんとしたわ。どうして結婚前にそう言っ
てくれなかったのかしら。

夏子 で、本当のこと言ったの？

香織 言わない。だって、もっとけんかになるもの。

それからは家庭内別居。夫はあっちのお母さん
にべったり。

夏子 へえー、マザコンなんだ。それにしても、お
仲人さんひどいわね…。

香織 母はね、善かれと思って言ってくれたんじや
ないか、って言うんだけど。…わたし、今、体

調崩して、実家。それも…。

夏子 どうしたの？

香織 黙って飛び出したから、きっと怒ってると思
ってたの。

夏子 そう…。

香織 そうしたらお姑(しゅうとめ)さんから電話
があつて、わたしやっぱり悪いからすぐに戻り

ましようか、って言ったの。お姑さんたら「明
の世話はわたしがするからいい」って。

夏子 ふーん。

香織 それって、もう帰ってこなくていい、ってこ
とかと置いていたら…。(涙声)さつき…。

夏子 どうしたの？

香織 離婚届が送られてきたの…。

夏子 えーっ！

花を下さい。

香織 わたしも黙って飛び出したの悪かったけど、

夏子 お墓参り…？

それ以外にどんな悪いことした？ でも、向こ

香織 いつか言ったわたしを可愛がってくれた元夫

うのおばあさんだけは、わたしにとっても優しく

のおばあさんが亡くなったの。

してくれたの。明はわがままでから、香織さん

ごめんなさいね、って。わたし、おばあさんに

(鳥の囀りなど)

申し訳なくて。

明 あ、香織！ お参りに来てくれたの？

夏子 その後、香織さんのことが気になりつつ働い

香織 明さん！ …わたし、おばあさん好きだっ

ているうちに、数カ月過ぎた。

たから。

明 ごめん。

香織 こんにちは。

明 離婚した後、ばあさんに散々言われたよ。

夏子 あら、しばらくね。どうしてたの？

香織 え？

香織 わたし…もう大丈夫よ。今日はお墓参りのお

明 香織さんは良い子だ、とても頑張ってたって。

そして仲人さんや君を責めてるだけでは何も解

決しないし、人も自分も幸せになれない。まず、

相手の幸せを願わなければね、って言われた。

聞いているうちに、ふと君の笑顔が浮かんできて

ね。何だか懐かしかった。

香織
…。

明 この後、予定ある？ お茶でも飲みに行かな

い…？

夏子 これは、その後、香織さんに聞いた話だけど、

多分あの2人は…。フフ…。

『花ものがたり』

第二回 スイートピー

*登場人物

夏子

夏子の母

二郎 (蕎麦屋の主人・45歳)

二郎の母親 (75歳)

夏子 3月の卒業シーズンは、花屋は大忙しだ。送

別会の大きな花束から、幼稚園を卒業する子の

小さな花束まで。それに、中・高生の胸に付け

るコサージュ…。

母 夏子、お昼作ってる暇ないから、おそば屋さ

んに出前頼んで。

夏子 はーい。

(バイクの音。止まる)

二郎 お待たせー。

母 あらー、ご主人がわざわざ…？

二郎 いやあ、店にばっかりいると、気がめいっち

やって、ちよっと抜け出して。

母 どうしたの？ お母さん最近お見かけしな

いけど、お元気なんでしょう？

二郎 いや、参ってるんですよ。

母 どこか、お悪いの？

二郎 もう、あつちが痛いのかつちが痛いのか、持病

の腹痛が起こって、神様にお願ひしても治らな

い。それで、年寄り仲間から聞いた治療法が、

へソの上に梅干の皮張って、その上に熱い灰を

乗せるんだって。普通、そんなことやりますか

ねえ。へソが熱いとかかゆいとか、もうメチャ

クチャですよー。

母 あらあら…。

二郎 医者嫌いなんですよ、いくら言っても行かな

い。それで店が忙しいつてのに、女房や子ども

たちにも「わたしがこんなに痛がつてんのに」

なんて八つ当たりして、困ってるんですよ。

夏子 じゃあ、これ、小さな花束だけど…：はい、ス

イートピー。おばあさんのお見舞い、気持ち

和むかも。

二郎　ありや、これはありがたい…。おっと、お店が忙しいのに油売ってすみません。

夏子　夕方、そのおばあさんがやって来た。

つね　ごめんください、さつきは奇麗なスイートピ―をありがとうございます。わたし、大好きなんですよ。

母　まあ、お元気そうで…。

つね　そんなことありませんよ。わたしの持病の腹痛が…。

母　まあまあ困りますね。じゃあ、いいおまじないを教えて差し上げましょうか？

つね　おまじない？

母　はい。

つね　おまじないで助かるんですか？

母　多分。

つね　多分ですか…？　それでどんな？

母　簡単ですよ。一日中何遍も『ありがとうございます』って唱えています、ありがとうございます。ればいいですよ。

つね　ちよつと奥さん、わたしのこと馬鹿にしているんですか？　そんなこと！　わたしは毎朝、神様に「ありがとうございます」と言って拜んでいるんですよ。

母　神様だけでなく、一日中、人にも、食べ物にも、顔を洗っても、トイレに行っても、ありが

とうございます、ありがとうございます、と言
うんですよ。

母 うそだと思って、やってみたらいかがです

つね そんな…！

か？

母 例えば、借金取りが来ても「ありがとうございます
います」。

夏子 母が忙しさに紛れ、いいかげんなことを、と
思っていたら。また出前を頼んだ時のこと。

つね どうして！？

母 だって、こちらから行って返すものを、わざ

二郎 奥さん、うちの母親、変になっちまって。

わざ取りに来てくれるんですよ、ありがたいで

母 え、また具合が？

しよ。孫が外で遊んできて、服を泥んこにして
帰っても、ありがたい。

二郎 いや、そうじゃないんですよ。何だかね、最
近ありがたい、ありがたい、って言うんですよ。

つね なぜ？

母 だって、元気だからこそ、泥んこになれるん

わたしが店に仕事に出る時や、子どもが学校か
ら帰ってきた時…。

ですよ。

つね そりゃ、まあ…。

つねの声 二郎、今日も元気に仕事が出来てありが

たい、ありがたい。おお、トシちゃん、学校からけがもせずに帰って来たのかい、ありがたいありがたい。あーら、良子ちゃん、遊びにきてくれたの、ありがたい、ありがたい。

二郎 何だかうちの雰囲気すっかり変わりました

よ。母親は店にまで出てきて、ありがたい、ありがたい。おかげでお客さんから“ありがたいやばあさん”って言われるようになって…。

母 お腹痛のほうはどうなったんですか？

二郎 あ、そう言やあ、何も言わなくなりましたね。

でもね、初めは頭がおかしくなったのか、それとも俺のこと、からかっているのかと思いましたよ。一体何なんですかね？

母 (笑う) でも、おなかが治って良かったじゃ

ありませんか。

二郎 こないだ、食い逃げに遭いましてね。

母 あらあら…。

二郎 わたしは追いかけてようとしたんですがね、母親はそれを止めるんです。

つねの声 ありがたい、ありがたい。

二郎の声 何で食い逃げがありがたいんだよ！

つねの声 ここのおそばがおいしいから、あの人は

お金が無くても来たんだよ、ありがたい、ありがたい…。

二郎 それを聞いていたお客さん大笑い。でも…そ

れからですかねえ、お客が増えたんですよ。あ
っ、いけね、また油売つちまつて。すみません、
お店忙しいのに。

(バイク去る)

夏子 お母さん、すごいおまじない知ってたね。

母 (笑う) 前に、お客さんに聞いた話よ。自分
の心でね、自分を生かすことも殺すことも出来
るって。

夏子 そう言えば、「幸せになりたい」って友達が
いて、結局チルチル・ミチルじゃないけれど、
「『幸せだなあ』って何となく思う日々が幸せ
なんだ」って結論にたどり着いた人がいたけど、
ありがたい、イコール幸せなのかも…。

母 夏子、そんなこと言っていないで、さつさと手

を動かす！ もうひと頑張りよ。

夏子 ありがたい、ありがたいってね…。

母 そうそう、書き入れ時なんだから。

夏子 あっ。

母 どうしたの？

夏子 お母さん、おそば伸びちやうよ。

母 忘れてた！

『花ものがたり』

第三回 トルコキキョウ

*登場人物

夏子

夏子の母

里美（35歳）

健二（里美の父親）

夏子 花屋が比較的暇なのは一、二月と夏の盛りだ。

そんな夏のある日。

夏子 お母さん、何やってるの？

母 ちょっとお見舞いにお花持って行くこうと思っ

て…、何が良いかなあ…。

夏子 誰？

母 ほら、お弁当屋さんのお嫁さんの…。

夏子 ああ、里美さん。

母 そうそう、里美さん。

夏子 わたしの、高校のバレー部の先輩よ。ずーつ

と会ってないけど、病気？

母 お花は…。

夏子 里美さんならトルコキキョウが好きよ。

母 じゃあ、それにカスミソウに…。

（町のノイズ）

母 夏子、ついて来なくなっちゃったいいのに。

夏子 わたしだって心配だもの。里美さんどこが悪

いの？

母

この間、難しい顔して歩いている里美さんの実家のお父さんに会ったの。もうちよつとで自転車にぶつかりそうだったから、わたしが慌てて手を引つ張って、「どうしたんですか」って聞いたら。

健二の声

里美が、ここんどこ寝込んで…。病気が

っていうか、事故で足にまひが残って動けんのです。何でも、店に弁当を買いに来たお客さんが、金だけ払って弁当を忘れて行ったのを、里美が追いかけてって、バイクにはねられたんですよ。…あそこの姑（しゅうとめ）さんはきついですよ。働けん里美に嫌みを言ったらしく

て、里美が少し良くなった時に、里美たち夫婦

は2階に住んどるんですがね、店を手伝いに行こうと階段を下りかけて、踏み外して落っこちて、また寝たきりと言うか…。うちの女房が生きていれば、家で面倒でも見るんですがねえ…。

里美

すみません、おばさんも夏子さんも、わざわざ…。

ざ…。

夏子

さつき母に聞いてびつくりしたのよ。

里美

最近…つくづく思うんだけど、わたしなんか

いないほうがいいのかも…。店の仕事はもちろん、わたしに出来ることはなんにもないの、ただ寝ているだけ。この家の厄介者なの。

夏子

そんな…！

里美 (涙声) ここのところ、誰もこの部屋には来

ないの、夫も子どもも。誰かが食事を置いてそ

れを取りに来るだけ。わたし…寂しいし、つら

くて…。ごめんなさい、こんな愚痴こぼして。

母 里美さん、わたしたちにうんと愚痴をこぼし

て、それでちよつとでも気が晴れるのならいい

のよ。いくらでも聞いてあげる。そうそう、ち

よつと窓でも開けましょうか。

夏子 お母さん暑いよ。

(窓を開ける。せみの鳴き声)

里美 せみの声…。

夏子 そう、暑い夏の盛り。窓、閉めようか？

里美 そのままにしておいて、外の風なんて久しぶ

り…。何だか、外は生きてるんだなって感じがする。

母 里美さん、あなただって生きてるのよ。出来る

ことなんていっぱいあるわ。そりや体を使って

ご家族のことはしてあげられないかもしれない

けど、心を使ったことある？

里美 心って？

母 つまり心の働きよ、寝ているから何もできな

いと思ってるかもしれないけど、心を使うこと

は出来るでしょ。

夏子 何よ、禅問答みたい。

母 そうねえ。「今日一日、子どもが学校で元気

に勉強出来ますように」とか、「主人が仕事場

で、元気に働けますように」って、お祈りする

ことは出来るでしょ。

里美 それは、まあ…。

母 そしてね、お子さんが学校から帰ってきたら、

「お帰り」って。ここにお食事を持って来てく

れたら、「今日学校で、どんなことがあったの？」

って聞いてあげるの。ご主人にもよ。「お仕事

どうだった？」って、声をかけてあげるの。こ

れがあなたの、今日からのお仕事。

里美 …はい。

母 心の中でいいから、家族の人を思うこと、そ

して声をかけてあげること。里美さんは厄介者

なんかじゃないのよ。

里美 やってみます。それに、奇麗なお花をありが

とございました。

夏子 トルコキキョウの花言葉は“希望”よ。カス

ミソウは“切なる喜び”。

里美 二つともステキね。

夏子 それから、ひと月程たったころ。

健二 ごめんください。

夏子 いらっしやい。あ、里美さんのお父さん。お

母さーん。

母 何よ大きな声で。…あら、いらっしやいませ。

健二 先日はありがとうございました。

母 何でしょう？

健二 里美が元気になりましたね、奥さんのおかげ

だって言うんです。

母 あら…。

健二 今まで寄り付きもしなかった子どもが、学校

から帰ってくる、かばんを放り出して、里美

の所へ来て、「今日、学校でこんなことがあつ

たよ」って話しに来るし、宿題も里美のそばで

やるようになったそうです。里美の夫も仕事か

終わると里美の所に来て、「今日はこれこれの

弁当がよく売れた、里美も何か新しいメニュー

を考えてくれないか」、なんて言うそうですよ。

母 まあ、良かったですね。

健二 それにリハビリも始めて、松葉づえで何とか

歩く練習をしていますよ。

夏子 里美さんやる気になったんだ、おじさん、良

かったですね。

健二 ありがとう。

夏子 ある日のことだ、店の外で男の人が中をのぞ

いていた。

夏子 お客さんかなあ。男のお客さんって、お花選

ぶのに時間が掛かるのよね。

母 あら、あの人、里美さんのご主人よ。

夏子 えーっ！

母 お弁当屋さんで見掛けたことがある。

夏子 いらっしやいませ、あの一、奥様のお好きな

お花はトルコキキョウと…。

『花ものがたり』

第四回 カーネーション

*登場人物

夏子

山中（ホームレス・45歳）

夏子の父親（60歳）

父 夏子、母さんが昼飯だって言ってるぞ。

夏子 わたし店番してるから、お父さんお先にどうぞ。

父 おう。

夏子 さつきから気になっていることがある。家の

花屋の前はパン屋さんだ。ショーウィンドー越

しに、おいしそうなパンが並んでいる。さつき

から男の人が立って、パン屋のウィンドーをチ

ラチラ見ている。汚れたヨレヨレの服装で、伸

びたクシヤクシヤの髪。そんなこと言ったら悪

いけど、ホームレスのような…。年は…よく分

からない。㊦代、㊧代？ その人が、わたしを

見た。目をそらす間もなく、目が合ってしまった

た。男の人はかすかにほほ笑んで、こっちへ近

付いてくる。

山中 あのー。

夏子 は、はい。

山中 きれいなお花ですね。

夏子 ありがとうございます。

山中 すみません、お願いがあります。

夏子 え？

山中 あの…。千円貸して頂けないでしょうか？

夏子 きつと、何も食べてないんだわ、可哀想。で

も、その格好じゃ、パン屋にも入れない…。

山中 あ…、すみません。

夏子 わたしは向かいのパン屋に行き、適当にパン

を買い、その袋と千円を渡した。男の人は、び

っくりしたような顔をして、深々と頭を下げた。

山中 ありがとうございます。ご親切は忘れません。

夏子 ちよつと待つて。

夏子 わたしは、売り物にならないカーネーション

を4、5本手早く束ね、「元氣を出してね」と

いう気持ちを込めて、その人に渡した。

父 夏子、昼飯食って来い。さっき天気予報見て

たら、夕方から台風が来るらしいぞ。

(風雨の音)

夏子 天気予報当たったわね、お店は？

父 お客さんも来ないだろうから、そろそろ閉め

ようか。

夏子 あっ…。

父 どうした？

夏子 たしか、川の橋の下に…。

父 ああ、最近ホームレスのダンボール小屋が出

来てたなあ。

夏子 お父さん、わたし、ちよつと見てくる。

父 見てくる…？ この雨風の中を、何を見に…

おい、やめなさい！

(雨風の中を走る夏子)

父 (走りながら) おーい夏子、どこに行くんだ

ー！

夏子 (同) 橋の下。

父 (同) こんな雨の中を、やめなさい。

夏子 (息フウフウ・叫ぶ) すみません、誰か居ま

せんか？ 誰か居ませんか？

父 (近づいて) 何やってるんだ！？ こんな所

にお前の知り合いでもいるのか？

夏子 分からない。

父 誰もいないじゃないか。ほーらびしょ濡れだ、

早く帰ろう。

夏子 それからひと月ほどしたころ、店にいた父が

呼んだ。

父 お前にお客さんだ。

夏子 え？

夏子 見知らぬ中年の人が立っていた。

山中 先日は、ありがとうございます。

夏子 え？

山中 千円お借り致しました。

夏子 あ、あなたが…、あの時の…？

山中 はい。それで、千円とパンのお代をお返しに

来ました。

父 一体何の話だ？

山中 あ、わたしは山中と申します。会社をリスト

ラされ、先月までホームレスをしていました。

父 え、そんな風には見えませんが…。

夏子 お父さん！

山中 お嬢さんのおかげです。

父 どういうことですか？

山中 お借りしたお金で飲み物を買ひ、パンを食べ

た後、街外れの国道に立っていた時です。廃品

回収の車が通りかかりました。いったんわたし

の前を通り過ぎてから、バックして戻って来て

「何をしている？」と聞きました。わたしはと

つさに「仕事を探しています」と言いました。

父 ほう。

山中 そうしたらその人は、「本当に働く気がある

のなら雇ってあげよう。ただし、急ぎの仕事が

あるので3時間ほどかかる。それまでここで待

っていたらな」と言ったのです。わたしは待ち

ました。頂いた花がしおれないように、近くの

公園に行って、持っていたペットボトルに水を

入れて、花を挿しました。戻ってきたその人は、

「今日は女房の誕生日なんだ。それもらつてもいいか?」。あの人はきつと、わたしの持つていたカーネーションに目を留めて、車をバックさせたのだと思います。お嬢さんのおかげです。

夏子 おめでとうございます、これわたしからの就

職祝いです!

夏子 良かったわね…!

山中 はい。住み込みで働いて、給料は小遣い程度ですが、働けること、住む所、三度の食事が頂けることがどれほどありがたいことか、身に染みて感じています。お宅のお店、実はサラリーマンのころ、一度伺ったことがあるんですよ。

父 ほうー、それはそれは、お客様だったんですね。

夏子 わたしは大急ぎで小さな花束を作った。

『花ものがたり』

第五回 ヤマユリ

*登場人物

夏子

石田 (商店街の会長)

恵美子 (石田の妻)

武雄 (本屋の主人・35歳)

稔 (小1の男の子)

子どもたち

石田 おはよう夏ちゃん。

夏子 あ、薬屋のおじさん。おはようございます。

父は今、市場に行ってます。

石田 いや、お父さんじゃないんだ。夏ちゃんに手

荒れの葉持って来た。

夏子 わあ、ありがとうございます。

石田 お花屋さんってのは、綺麗な仕事だと思って

いたんだがな、夏ちゃんと知り合って認識が変

わった。

夏子 そうですよ。手は荒れるし、冬でも暖房はつ

けられないし、力仕事が多いので万年腰痛、腕

には筋肉…。

石田 その筋肉のついた力自慢の夏ちゃんに、お願

いしたいことがあるんだけど。

夏子 いやだー、力自慢だなんて。か弱い女性に…。

石田 ハハ…。実はね、商店街の会長として、夏ち

ゃんにお願いがあつて来たんだ。

夏子 はー、何ですか？

石田 ほら、商店街の子どもたちの夏休みのキャン

プ。

夏子 ああ、回覧板が来てましたねえ。

石田 そう、あれに夏ちゃん参加してくれないかな

あ。

夏子 キャンプに？

石田 うん。参加する子どもたちは約15人、大人は

わたしたち夫婦と本屋の武雄君と、後ねえ…頼
んでもみんな断られて…。それで、夏ちゃんに

頼めないかと思つて。

夏子 うーん、どうしようかなあ…。

石田 2泊3日だから、何とか都合つけてよ。

夏子 え、わたしにお手伝い出来るかなあ。

石田 大丈夫だよ。

夏子 久しぶりの山の空気はおいしい。わたしは菓

屋の石田さんに言われた通りに、子どもたちの
手伝いをやや緊張しながらする。

石田 おーい、薪（まき）集まったかー。飯ごうで

ご飯炊くからな。係の子どもは集まれー。

恵美子 みんな、武雄お兄さんと夏子お姉さんの言
うことを良く聞くのよー。

子どもたち はーい、はーい。

夏子 カレー当番の人たち、こっちに集まってー。

子どもたち わーい。はい、はーい。

夏子 あはは、武雄さん、そっちの手が空いたらこ

つちを手伝ってね。

ました。行ってみます。

武雄 了解！

夏子 小さい子は6年生のお手伝いね。

(川のせせらぎ)

稔 はーい。

稔 (しゃくり上げながら) ぼく、晩ご飯の後片

夏子 おばさん、無事に1日目が終わりそうですね。

夏子 偉いねえ。

恵美子 そうね。あら、武雄さん、何か…。

稔 (同) そうしたら、5年生の孝ちゃんが、僕の

武雄 (慌しく) 稔君が泣いてるんですよ、なだめ

洗った飯ごうが「まだ汚れてる」って言うんだ。

ても泣き止まないんです、どうしよう。

一生懸命手伝ったのに…。

夏子 稔君って、1年生の？ ホームシックかなあ。

恵美子 そうかあ、暗い所で洗うと、見えにくいか

恵美子 ちょっとあの子の家、複雑なのよ。最近親

ら、洗い残すことがあるのよ。それをふいてく

が離婚して、お母さんとおばあさんと一緒にい

れた子が良く見てくれたから、良かったのよ。

るんだけど、お母さんパートに行つてて…。

そういう時にはね、「まだ汚れてたの、ありが

夏子 ああ、おばあさんタバコ屋さんの？ 分かり

とう」って言って、洗い直せばお互い気持ちがい

いのよ。分かるかなあ？

稔 ……うん。

夏子 稔君偉いよ、1年生なのにお手伝いして。お

母さんも、今頃おうちで稔君元気にしてるかな、

ご飯食べたかな、って思ってるよ。

恵美子 そうよ。

稔 (急に声を上げて泣き出す) ママは僕のこと

なんか、何とも思っていないよ！

夏子 ええ？

稔 (泣きながら) 僕なんか、いらぬ子なんだ！

夏子 どうして？ どうしてそんなこと言うの？

稔 こないだ、「稔なんかいないほうが良かった」

って言ったんだ。

夏子 ……それは…稔君が何かいたずらをしたからじ

や ないの？

稔 パパも、僕を置いてどこかに行っちゃった。

夏子 稔君、稔君。あのね、それは…。

夏子 どう慰めていいか分からなかった。わたしは

稔君を抱きしめて川原に座っていた。親が何気

なく言った言葉が、どんなに子どもの心を傷つ

けるか…。

恵美子 ねえ、みんなが心配してるから帰ろう。

夏子 おんぶしてあげる、はい、お姉さんの背中つ

かまって、よいしょっと！

恵美子 あのねえ、お母さんはいろーんなことがあ

って、疲れてクタクタで、それで、ついそんな

こと言ったんだと思うの。今は、きつと稔君に謝りたいと思ってるわよ。本当は、君のこと大好きなんだもの。

(鳥のさえずり)

石田 さあー、きょうはハイキングだ、みんないいかなー。

子どもたち はーい。

稔 お姉さん、お姉さん。

夏子 何？

稔 お花がいつぱい咲いてるよ。あつ、あそこに大きい白い花。

夏子 あつ、あれは多分ヤマユリよ。いいにおいが

するよ。

(草の茂みをかき分けて)

稔 本当だ。ねえ、これママのお土産にしたい。

夏子 うん、綺麗だから、お母さんきつと喜ぶよー。

稔 うん！

夏子 キャンプが終わって、迎えに来たお母さんは、ヤマユリの花を大事そうに持った稔君をギュッと抱きしめた。稔君はもちろん、満面の笑顔だった。

『花ものがたり』

第六回 菊

*登場人物

夏子

久恵（75歳）

女（中年）

男（中年）

夏子 花屋の仕事は、見かけによらず重労働だ。店が終わった後はくったくた。けれど、夜、わたしの楽しみは、パソコンで会員制のブログ仲間のメッセージを見たり、書き込んだりすることだ。

（パソコンを立ち上げる音）

夏子 え！ 脳梗塞（こうそく）という文字が目に入った。ブログ仲間の誰か…？

久恵の声 愛犬のココアが脳梗塞になりました…。

夏子 なんだ犬かと思ったが、すぐその後反省した。

ペットだって、立派な家族の一員じゃないの。

久恵の声 16歳のシェルティです。高齢犬なので家の中でおとなしくしていたのですが、突然、発作を起こしました。わたしはパニックになってしまいました。人間なら、「あそこが痛い、ここが痛い」と言うけれど、犬は何も言いません。

わたしはただ抱きしめているだけでした。発作が治まった後、異常行動を取るようになりました。獣医さんへ慌てて連れて行ったら、脳梗塞だと言われました。注射をして、お薬を頂きました。でもとても心配です。 ココアのママ

(パソコン・キーをたたく音)

夏子 ココアのママさんへ。心配ですね、お薬を飲んで元気になるようにお祈りしています。 チューリップ

女の声 わたしもワンちゃんを飼っています、心配

夏子 わたしのニックネームは、チューリップ。 32

ですね。質問、異常行動ってどんなことですか？

いちご

歳でちょっと気恥ずかしいけど、わたしが生まれた時、庭のチューリップが満開だったと父が言っていたからだ。

久恵の声 例えば、家の中をウロウロして、壁やた

んすにぶつかったり、冷蔵庫と壁の間の狭いす

夏子 母の日がもうすぐなので、アレンジメントの

き間に入ろうとしたりすることです。

注文で夜遅くまでの仕事が続いた。久しぶりに

ココアのママ

パソコンを開ける。

(パソコンを立ち上げる音)

久恵の声 2度目の発作を起こしました。わたしと

ココアは2人きりなのに…。神様って意地悪だ

…。ココアのママ

女の声 本当にね、ココアちゃんはなんにも悪いこ

としてないのに。いちご

男の声 ワンコも心配だけど。ココアのママさん、

恋人でも作って結婚したらどうですか？ 気持

ちがまた変わるかもしれません。

無趣味の男

久恵の声 恋人も結婚も興味ありません！

ココアのママ

男の声 へえー、変わってますね。僕でよかったら

…なんて。ウソです、冗談ですよ！

無趣味の男

女の声 心配しているココアのママさんに、そんな

冗談は良くないと思います。いちご

男の声 すみません、僕なりに励まそうと思ったん

です。

あつそうそう、僕も子どものころ犬を飼って

いましたが、庭の花や、縫いぐるみと遊ぶのが

好きでした。お役には立たないかな…？

無趣味の男

(パソコンキーを叩く音)

夏子 いちごさんの意見に賛同します。ココアのマ

マさん、ワンちゃんは今生きています、一緒に

過ごせて幸せだったと思う時間を、これからも

長く作って下さい。悪いことばかり想像しない

で！ 神様は意地悪なんてされない信じまし

よう。
チューリップ

来る子たちは、みんな幸せですよ。病気になつても、心配して連れて来てくれる家族がいる。

看病してくれる人がいる。動物たちは人間より

たくましいですよ。肅々と与えられた命を生き

ているんです。それを勝手に可哀想なものにし

て、悲しんだり哀れんだりするのは、この子た

ちに失礼ですよ」

いちご

(商店街のノイズ)

久恵 こんにちは。

夏子 いらっしやい、まあ、お孫さんですか？ そ

のベビーカー？ あら、ワンちゃん!?

久恵 ホホ…、犬のカートを買ったんですよ。歳取

って弱っちゃって、ねえココア。

夏子 ココア？ えっ！ じゃ、あのブログのココ

アのママさんはあなた！？

久恵 え、じゃあ、あなたは？

夏子 わたしはチューリップ。

久恵 あらまあ！ ココアのママがこんなおばあさ

んでびっくりしたでしょ。恋人作れなんて言われたりして、フフ…。

夏子 いえ、いえー。お花、何を差し上げましょう

か？

久恵 あのブログを見て、思い出したんですよ。コ

コアが若いころ、庭の菊の花や葉っぱをむしって遊んでいたことがあるんです。今はマンションで庭も無いし、それで菊のお花を買って、コ

コアのそばに置いてやったら、喜ぶかと思って。

夏子 はい、分かりました。菊のお花のにおいをか

いで、元気になるといいね、ココアちゃん。菊

の花言葉は、“逆境にいても快活”ですよ。

久恵 あらそうなの。じゃ、わたしも老々介護で頑

張りましょう。

夏子・久恵 (笑う)

『花ものがたり』

第七回 ガーベラ

*登場人物

夏子

夏子の母

渡辺（老人ホームの住人）

鈴木（女性介護士）

母 夏子。

夏子 何？

母 店の残った花、老人ホームに届けてね。

夏子 週に1度、老人ホームにお花を届けている。

もちろん差し入れた。

夏子 こんにちは。

鈴木 あら、お花屋さん、いつもいつもすみません。

夏子 いいんです、お花も、飾ってもらえればうれ

しいから…。

夏子 わたしは小さな花瓶に、お花を手際よく分け

て挿す。そしてテーブルのあちこちに飾る。

鈴木 いつもね、お花をととても喜んで下さる方がた

くさんいらつしやるのよ。ねえ、渡辺さん。

渡辺 俺は、花なんか…。

夏子 そのお年寄り、そつぽを向いて杖を持ち、

立ち上がるうとした。わたしが手助けをしよう

と、手を出したが振り払われた。

夏子さんなるべく、声を掛けてあげてね。足を

骨折して、今リハビリ中なの。

夏子 こんにちはー。

(コトン、杖倒れる)

夏子 介護士の鈴木さんが、慌てて杖を拾い手助け
する。

夏子 渡辺さんは庭のベンチに座っていた。

(鳥のさえずり)

夏子 何度かホームに通ううちに、そのお年寄りの

ことが気になってきた。あいさつしても、いつ

夏子 ここ、座ってもいいですか？

渡辺 …好きにしろ。花屋か。

も返事はない。

夏子 はい。

渡辺 その、赤い花は何て言う？

鈴木 渡辺さんはね、無口というか、頑固というか、

夏子 これですか、ガーベラです。

他の入所者の方ともあまり口をきかないのよ。

渡辺 ふん。

夏子 お好きですか？

渡辺 …べつに。

夏子 でも…。

渡辺 (ポツリポツリと) …俺の生まれた所は、小

さな田舎町だ。父親は早くに死んで、貧乏だった。母親が誰かにももらったんだろう、その花の鉢植えを大事に育てていた。

夏子 お母さんはお花が好きだったんですね。

渡辺 母親は弱視だったんだよ。

夏子 はあ？

渡辺 目が良く見えないんだ。だから、花に目を近づけて見ていた。

夏子 そう…ですか。

渡辺 俺は…、その母親の目を治そうと、中学に入

ると新聞配達のアルバイトを始めた。段々畑の

あるような土地だ。新聞が重くて自転車がひっくり返ったことが何度もあった。

夏子 はい。

渡辺 冬が来た時だ。夜明け前の冷え込みはひどい。

指がひび割れ、痛くて仕方がない。雪が降り積もると、最悪だった。吹雪の時なんか、目も開けていられない。

夏子 そうでしょうねえ。

渡辺 あんたねえ、想像だけでものを言うもんじゃない。

夏子 すみません。

渡辺 やつと家に帰りついた俺は、「こんなつらい

配達は今日限りだ」と言った。そうしたら母親

は、「ご苦労さん、寒かっただろうね。でも、つらいのはお前だけじゃない。牛乳配達や郵便配達のおじさん、行商のおばさんたちもつらいのは一緒だ。お前が届ける新聞を待っている人もいるんだからね。お前のやっていることは、世の中のお役に立っているんだよ」こう言ったんだ。

夏子 はい…。

渡辺 吹雪がやんで配達をしていると、屋根の雪下ろしをしている人たちが「毎朝ご苦労さん」とか、「大変だなあ、ありがとう」と言ってくれ。俺はうれしくて、「もう泣き言など言わずに頑張るぞ」と新聞配達を続けたんだ。だが…。

夏子 どうしたんですか？

渡辺 母親の目は、手術しても手遅れで治らない、

と医者に言われたんだよ。

夏子 ああ…。

渡辺 その話を聞いた時、俺は絶望して、新聞配達をやめてしまった。そして、たまった金を修学旅行の費用に回した。

夏子 すごいですね、自分で働いたお金で…。

渡辺 その後が良くない。

夏子 えっ？

渡辺 中学を出た後、都会に働きに出たものの、職を転々と変えた。母親はきつと心配しただろう。わずかな仕送りはしたが、本当は田舎が嫌で逃げ出したんだ。グレてた時もある。それに引き換え、母親は、よく見えない目で草取りをした

り、道の掃除をするような人だった。神様のお土地だと言ひ、まだ手足は動くし、耳も聞こえると言つてな…。

夏子 お母さんつて、誠実な方だったんですね。

渡辺 …こんな話、初めて人に話した。なぜだろう？

夏子 それは、このお花が取り持った縁ですよ。お

母さんの好きだったガーベラの花言葉は、希望

ですよ。

渡辺 花言葉？ 何だ？ 花がしゃべるのか？

夏子 いいえ…そうじゃなくて。

渡辺 ハハ…からかったんだよ。それ一本くれない

かな？

(ほうきで掃いている)

夏子 それからしばらくたってからのことだ。ホー

ムにお花を持って行くと、渡辺さんがホームの庭の掃除をしていた。よく見えない目で掃除をしていたと聞いた、お母さんの姿と重なった。

夏子 渡辺さん、もう足は治ったんですか。

渡辺 おう、花屋の姉ちゃんか。掃除もリハビリの

ようなもんだ。それに運動にもなる、ハハ…。

『花ものがたり』

第八回 桔梗

*登場人物

夏子

修 (菓子職人・32歳)

(商店街ノイズ)

夏子 あら、修さん、いらっしやい。久しぶり…。

去年の高校のクラス会以来？。

修 うん、元気そうだね。

夏子 修さんがお花買いに来るなんて珍しい。

修 いや、買うんじゃないくて、ちよつと花見せて

もらつてもいいかなあ。

夏子 いいわよ、どうぞ。でもなぜ？

修 新しい和菓子を作ろうと思つて、何か花でヒ

ントが得られないかなつて。

夏子 随分商売熱心になったのね(笑い)。アハハ

ハ…。

修 からかうなよ。

夏子 だって、お父さんの後継ぐの嫌だって、一度

は自動車会社に就職したでしょ。ねえ、どうし

てまた、お菓子屋さんを継ぐ気になったの？

修 ああ…。俺、口下手だろ。

夏子 うん、そうねえ…。

修 あっさり認めんなよ。

夏子 その通りだもの…。

修 営業に回されて、先輩の後を付いて回った

ころは良かったんだけど、一人で回るようになってからは一台も売れないんだよ。毎日毎日、歩いて歩いて、靴の底減らして。

夏子 そう…、大変なんだ。

修 結局、親せきに1台車買ってもらった。

夏子 アハハ…。

修 で、さあ。

夏子 何？

修 何度も何度も足を運んで、やっと車買ってくれそうなお客さんつかまえたんだ。

夏子 へえー。

修 ところが、土壇場になってキャンセルだよ。

で、その奥さんが僕を家に上げてくれて、「こ

めんなさいね」って、おいしいお茶と和菓子を

出してくれたんだ。それが落ち込んでた僕に、とてもおいしかったんだよ。

夏子 ふーん。

修 僕はその時に気が付いたんだ。お菓子は人の

心を癒し、優しくしてくれるって。そしたら、毎日毎日、仕事場で、立ちっぱなしで黙々と働いていたおやじが、急に僕の心の中で偉大な存在になってきたってわけさ。

夏子 そうなんだ。

修 でも、仕事を継ぎたいって言った僕に、おや

じは何も教えてくれない。「体で覚える」って

言ったんだ。

夏子 厳しいんだね。

修 菓子の作り方って、その日の気温や湿度によ

って変わるんだよ。同じことやってるようで、

毎日変わるんだ。

夏子 へえー、知らなかった。

修 あ、おっと、おしやべりばかりして…。

夏子 で、お花を見たいって言うのは？

修 うん、隣町の老人会から、敬老の日の集まり

に、たくさんの注文を受けたんだ。おやじが初

めて、「お前作ってみろ」って。

夏子 やったね。

修 うれしかったよ。…えーっと、どんな花がい

いかなあ。あ、菊なんてありふれてるだろ。

夏子 まあ、ゆっくり見ててね。

修 うーん…あ、これかな。

夏子 あ、桔梗（ききょう）？

修 色が奇麗だし、形もいいなあ…。

夏子 じゃあ、それ、わたしからプレゼントする。

持つて帰ってよく観察してね。桔梗の花言葉は、

“誠実”とか“気品”よ、頑張るって。

修 ああ、ありがとう。

夏子 それから、ひと月ほどしてからのことだ。商

店街で、ばったりと修さんに会った。

（商店街のノイズ）

修 やあ。

夏子 あ、ねえ、この間の桔梗のお菓子成功した？

修 いやあ、したんだけど…。

夏子 評判どうだった？

修 それが…。

夏子 どうしたの？

修 僕、バイクの荷台に箱をくくり付けて配達に行ったんだ。壊れないように慎重に運転したんだけど、配達場所に着くほんの手前で、猫が道に飛び出してきて、慌ててブレーキかけたんだ。

夏子 もしかして？

修 うん、そうなんだよ、向こうに着いて箱を開けたら、老人会の会長さんは、「これは見事な菓子だ」って言ってくれた。だけど、菓子が隅に寄って形が崩れてた。

夏子 全部じゃないんですよ。

修 そうだけど。僕は、その哀れなお菓子の姿を

見て、そこに置いて帰る気になれなかったんだよ。だって、わが子を送り出すような気持ちで運んでったお菓子が可哀想で、持つて帰ろう、いや、連れて帰ろう…。

夏子 連れて帰る？

修 そう。わが子と同じって言っただろ。お菓子にだっていのちがあるんだ。

夏子 お花にもいのちがあるのと一緒なわけだ…。

修 物作りって、いのちを吹き込むことなんだ。で、先方の人に謝って、「連れて帰らせて下さい」って言ったんだ。

夏子 ふーん。

修 老人会の会長さんは、夏ちゃんと同じように変な顔をした。

夏子 えっ、わたし、変な顔なんて…。

修 で、僕の気持ちを伝えたんだよ。そうしたら、

老人会の会長さんは僕の話の黙って聞いてくれて、
「よく分かった。そこまで自分が作る菓子
に、愛情を持っている君の心持ちがうれしい。」

その心を、いつまでも大切にしないよ」って。

夏子 老人会のお菓子は？

修 おやじに電話して、すぐに代わりに菓子を届

けてもらった。

夏子 良かったね、お店の信用を失わなくて。

修 それからなんだよ。

夏子 何？

修 その老人会の会長さんは、僕のことを気に入

ってくれて、店にも、たびたび来てくれるんだ。

老人会の茶道のサークルのお菓子も、僕の作った菓子を推薦してくれた。

夏子 へえー、ねえ、ところで、その形の崩れた桔

梗のお菓子はどうなったの？ まさか捨てちゃ
ったんじゃない？

修 とんでもない。可愛いわが子を捨てられない

よ。店に来てくれたお客さんに「こうこうで、
形が崩れてますけれど」と言って、プレゼント
した。

夏子 へ？ どうしてわたしの所に持って来てくれ

なかったの？

修 だって、夏ちゃんに売り物にならないお菓子

をあげたら失礼だろ。

夏子 あ、全然失礼じゃないよー。

修 でも…それ以上太らせたら悪いだろ？

夏子 こらあ！

修 あはは、今度、今度必ず持って来るよ。

夏子 絶対、約束よ！

『花ものがたり』

第九回 ひまわり

*登場人物

夏子

さだ (パン屋のご隠居・82歳)

(商店街ノイズ)

さだ 夏ちゃん。

夏子 あ、パン屋さんのおばあさん、おはようござい

います。今日は、何のお花になさいます？

さだ (吐息) あー、つまらないの…。

夏子 どうしたんですか？

さだ こんなに良いお天気なのにね。

夏子 だから…。

さだ 今日はおじいさんの月命日なのよ。

夏子 で、お墓参り？

さだ 駄目だって。

夏子 どうして？

さだ だって、店のバイトの子が休んで、忙しいから嫁と一緒にいけないって。私、一人でも行けるのにね、年寄り扱いして…。近所はともかく、一人でなかなか外に出してくれないのよ。

一人で行くつ…、あ、聞いちや悪いかな？

さだ 82よ。でも、歳で決められるのって、わたし嫌だわ。

夏子 フフ…。わたしよりお元氣なくらいなのね。

さだ あらあら、お世辞なんか言って。

夏子 いいえ、じゃあ…、今日は注文少ないと思

うから、わたしと一緒にしようか？

さだ え？ いいの？

夏子 はい。おじいさんのお好きだったひまわり、

持って行きましょうね。

(鳥のさえずり)

さだ 夏ちゃんまで、ひまわりお供えして、お参り

してくれて、ありがとう。

夏子 だって、わたしおじいさんに子どもどころよ

く遊んでもらったから、大好きだったのよ。そ

れに電車に乗ってこんな郊外まで来るなんて、

ピクニック気分ですよ。はあ、ここ空気良い

し、最高！

さだ そう、じゃあ帰りに駅前のおいしいうなぎ屋

さんで、お昼でもごちそうしましょうか。

夏子 あー、やったあ！

(小鳥の声など)

さだ わたしね、いつもお参りした帰りに不思議に

思うんだけど、おじいさんが、後ろから見守っ

てくれているような気がするの。同じ向きにな

って、一緒に帰って行くような気がしてね、心

丈夫になるの。

夏子 そうなんだ？

さだ それとね、若いころなんて、「お父さんまた

出掛けちゃって、帰ってくるの遅いわね、お酒

飲んだりパチンコでもしてるのかしら。子ども

は子どもで、言うこと聞かないし、勉強もしな

いし…。なんて、ぶつぶつ言いながらご飯を

作るわけ。すると、恨みつらみの入ったご飯が

出来るわけですよ。

夏子 (笑う)

さだ お風呂の掃除だって、「めんど臭いな」っ

て、ぶつぶつ言いながらお掃除していると、恨み

の入ったお風呂になるでしょ。家族のみんな、

毎日毒入りのご飯を食べて、毒入りのお風呂に

入って、恨みのこもった洗濯物を着ていること

になるの。

夏子 なるほどね…。考えたこともなかった。

さだ でもそうでしょ、ブツブツ言いながらご飯作

ると、みんなが元気になりますようにってご

飯を作るのと、違うでしょ。

夏子 確かにね。ウフフ。

さだ おじいさんがこんなこと、言ってたわ。

夏子 え？

さだ 飛行機に乗った時にね、「怖いから落ちませ

んように」って祈ったんだって。でもね、いく

ら自分で祈ってもパイロットが心臓まひでも起

こして、「うっ！」って言ったたら、一卷の終わ

りだって気付いたんだって。だから、飛行機で

働いている人たちの無事を祈ることにしたんで

すって。

夏子 確かにそうだけど…。

さだ 病院でもそうよ。自分の病気のことばかりお

祈りするよりも、お医者さんや看護師さんのお

仕事をお祈りするんだって。患者さんが喜ぶ結

果より、お医者さんが喜ぶ結果の方がいいんで

すって。

夏子 そうだけど、どうして？

さだ だって、患者さんがね、「もう退院していい

ですよ」って言われて、「良かった」って喜ん

で帰っても、例えばお医者さんが、「あれはも

う手遅れで、家に帰すしかない」。そんなこと

だってあるわけでしょ。

夏子 それもおじいさんが言ったの？

さだ そうよ、だからお世話になっている人のこと

を先に祈るんだって。「パチンコ屋に行っても、

そこで働いている人の幸せを願うとパチンコが

稼げ…」。そこまでおじいさんが言った時の顔、

見せたかったわよ。慌てて口を押さえて…。

夏子 あはは、バレたんだ。

さだ そう、パン屋の組合の仕事とか言っただけ

たのがバレて。「いやいや、つい付き合いで…」

なんて。

夏子 (笑う) でも良いおじいさんだったわ。

さだ わたしもそう思いますよ。

夏子 わたしだって愛情込めてお花を売っている

の。大事に飾って、みんなに喜んでもらえます

ようにって。

さだ 分かる分かる、夏ちゃんの気持ち。

夏子 あ、ねえ。

さだ なあに？

夏子 おばあさん、ちょっと矛盾してない？

さだ 何が？

夏子 だって、今朝お嫁さんが一人で外に出してく

れないって、愚痴をこぼしたでしょ。

さだ ええ。

夏子 それは、おばあさんのことを心配してくれて

いるわけですよ。

さだ まあ…。

夏子 だったら、感謝しなきゃ。

(街のノイズ)

さだ あらあら、一本やられたわね。さあ、駅に着

きましたよ。こここのうなぎ屋さんよ。

夏子 わあー、おいしそうなおい！

KONKOKYO

金光教本部 ラジオ放送係

【住所】 719-0111

岡山県浅口市金光町大谷 320

【電話】 0865-42-6453

【FAX】 0865-42-2114

【メール】 w-master@konkokyo.or.jp